

おーいひいばあさん

平川一茂

秋田県・一三・中学生

拝啓 雪の降る一二月にこの手紙を書いています。あなたが、天国に旅だったのは三年前の夏でしたね。あのとき、僕は気が動転していて、わけがわからなくなっていました。あなたが家からいなくなってから、しばらくの間、あなたはまだ家にいたような気がします。

あなたは、とても優しくかったです。そして、とても温かでした。そんな優しさに見守られて、僕は育つたのだと思います。僕は、そんなひいばあさんが大好きでした。

あなたは、どこから僕を見守ってくれているのではないのでしょうか。僕は、そんな気がしてなりません。

あなたが、この場所を去る前に植えたコスモスは、あなたがこの場所を去ってから、咲いていました。あなたは、コスモスになったのではないのでしょうか。そうやって、僕を見守ってくれていたのではないのでしょうか。

あなたが去ってから、悲しみはあっても、さみしさはありませんでした。

それは、あなたが僕のそばにいてくれたからではないのでしょうか。そう、コスモスになつて……。

あのコスモスのやわらかい色が、僕を包んでくれるような気がします。

コスモスは、秋にしか咲きません。

だけど、僕の心の中にはいつでも、いつまでもコスモスが咲いています。